

# 茨木のり子さんと星空・宇宙

柴田晋平

二〇二〇年六月九日

## 1 茨木のり子さんと星空・宇宙

茨木のり子さんの「はたちが敗戦」という文章の中にこんなくだりがあることを戸村雅子さんに教えていただきました。

なにもかもが、しつちやかめつちやかの中、学校から動員令がきた。東京、世田谷区にあった海軍療品廠という、海軍のための薬品製造工場への動員だった。「こういう非常時だ、お互い、どこで死んでも仕方がないと思え」という父の言に送られて、夜行で発つべく郷里の駅頭に立ったとき、天空輝くばかりの星空で、とりわけ蠍座さそり座がきらきらと見事だった。当時私の唯一の楽しみは星を見ることで、それだけが残されたたった一つの美しいものだった。だからリュックの中にも星座早見表だけは入れることを忘れなかった。(『茨木のり子集 言の葉』所収)

茨木さんが星空好きだった!? 私は学生の頃から茨木さんの大ファンなのですが、仕事は文学とは程遠い宇宙物理学や星空案内です。茨木さんへの思いは生涯片思いで終わりそうでした。しかし、この文章をよんで世界が一変。ちょうど、思いを寄せていた人が、同じよ

うに自分のことに興味を持っていてくれたことを知った青年のよう  
に小躍りしてしまいました。

茨木さんはどういった思いで星空を見ていたのだろうと考えてみ  
ました。星がもつともたくさん登場する作品は「夏の星に」だと思  
います。

まばゆいばかり

豪華にばらまかれ

ふるほどに

星々

あれは蠍座の赤く怒る首星 アンタレス  
永久にそれを追わねばならない射手座の弓  
印度人という名の星はどれだろう

天の川を悠々と飛ぶ白鳥

しっぽにデネブを光らせて

頸の長い大きなスワンよ!

アンドロメダはまだいましめをとかれぬままだし

冠座はかぶりてのないままに

そつと置かれて誰かをじつと待っている

層の星 粒の星 名のない星々  
うつくしい者たちよ  
わたくしが地上の宝石を欲しがらないのは  
すでに

あなた達を視てしまったからなのだ きつと

(詩集「見えない配達夫」より)



ない星座で、東京以南であれば図のように夏の夜に地平線すれすれに見えます。

現在私たちが見る星空は光害(人工の光による汚染)が激しくて、茨木さんがみた夜空とは全く違います。東北大地震や先日の集中豪

この詩に出て来る星や星座を見つければまずか。もしかしたら誰よりも茨木さんの方が星や星座を知っていたのではないのでしょうか。印度人という名の星が気になります。現代の正式名称はインデアン座です。今回調べて私も初めて知ったのですが、戦前は印度人座と誤訳され記載されていたそうです。山形からは見え

雨の時の大停電の夜、そのときはなかなか口には出せないのですが、後になって、あの時見た星空は言葉には表せないほど美しかったと多くの方がおっしゃいます。まさに、宝石箱をひっくり返したような美しい夜空が広がっていたのです。

「国敗れて山河あり」という詩句にあるように、人の世の移ろいやすさに対して自然の悠久不変を対峙させる表現は伝統的ですが、空襲のなかでは眼前の草木も山も焼き爛れ、山河・草木の自然のさらに外側で、全体を包み込む宇宙という大きな器があつて、その景色だけが残された美しいものだったということだと思えます。

星空は、キラキラした美しいものに憧れる心を癒してくれるだけではありません。私は星空案内をします。これは妄想かもしれませんが、星空を見たり宇宙の存在を感じることは世界平和に貢献できるかもしれない、と思っています。最も大きく自然を包み込む器である宇宙から地球や地上の人類の生活を見た時のちっぽけな印象と、必死に生活する日常の両方を対比できる心を持つことはとても大事なことでおもっています。宇宙のような広い心で、自分の悩みや、人類の歴史をながめてみようということです。

このような捉え方を、茨木さんの詩の中に見ることができます。「ネーブルの樹の下にたたずんで」と(『対話』)、「水の星」(『倚りかからず』)、「惑星」(未刊詩篇より『茨木のり子詩集』に掲載)などです。

さらに現代の天文学をとりいれると空間だけでなく時間の器もひろがります。私たちの体を作る有機物は酸素、炭素、窒素などを含みますが、宇宙が誕生した時にはこのような元素は全く存在しません。水素とヘリウムばかりでした。星の中でさまざまな元素が製造されて、星が爆発することで元素が宇宙に広がり、それを材料にし

て地球、そして、生命体が誕生しました。宇宙の時の流れの中に人類を考へることもできます。

星空・宇宙が登場する茨木さんの詩をあらためてかみしめる機会を与えてくださった会報の担当の皆様には感謝申し上げます。星空の美しさは人の心を惹きつけること、自然界のもつとも大きな器である宇宙を感じながら自分や世界を見直すことの大事さが再認識されたような気がします。

(山形大学・客員教授、柴田晋平。専門は宇宙物理学。科学文化の形成の活動をしている。星のソムリエ。)

## 2 Nの文章の背景

学生の頃は論理的なこと以外に真理は認めない風だったが、修士二年の時に、その流れに異変を与えたのが茨城のり子の「詩のこころを読む」[4]であった。それ以来、非論理的ともいえる詩の世界を歩けるようになった。この本は、人間を理解するための素晴らしい教科書になっていて、よく今も愛読している。私の紹介でこの本のファンになった隣人もたくさんいる。

山形に赴任して、偶然に「茨木のり子六月の会」と出会い、入会した。茨木のり子さんのお母さんの実家が庄内であったため鶴岡を拠点にこの会がある。会については創設者の戸村雅子さんの「茨木のり子への恋文」[5]に詳しいので参照されたい。

会報を読むだけの会員であったが、また偶然の出来事があり、今回、会報に「茨木のり子さんと星空・宇宙」という記事を寄稿することになった。ここに、全文[6]を紹介することにした。(全ての隣人に捧げる。)

## 準備メモ

「はたかが敗戦」[1]という文章に終戦直前の苦しい時代に茨木さんの唯一の楽しみが星空を見ることであったことが語られている。思春期は、あらかじめ答えなどない生きる目的などという問題にもがき苦しむ時期である。自殺などという選択肢に走る場合すらある。そのような時期が戦争に重なったときはさらに問題は難しく、突然の他殺、つまり、爆撃を受けて死んだり、徴兵されたりという状況に対峙することになる。

星空をみることを楽しとしていたことが書かれている部分を引用する。

…(前略)…

なにかもが、しつちやかめつちやかの中、学校から動員令がきた。東京、世田谷区にあった海軍療品廠という、海軍のための薬品製造工場への動員だった。「こういう非常時だ、お互い、どこで死んでも仕方がないと思え」という父の言に送られて、夜行で発つべく郷里の駅頭に立ったとき、天空輝くばかりの星空で、とりわけ蠍座さそりざがぎらぎらと見事だった。当時私の唯一の楽しみは星を見ることで、それだけが残されたたった一つの美しいものだった。だからリュックの中にも星座早見表だけは入れることを忘れなかった。

[1]

…(後略)…

茨木さんが小学校高学年の頃には、「まだ、お八つにも事欠かず、名古屋公演の宝塚も見に行けて」[1]、というあたりや、終戦直後さつそく、「いち早く復興したものの中に新劇活動があり、焼け残つ

た有楽座や帝劇で「人形の家」や「真夏の夜の夢」が上演されて、この世にこんなすばらしいものがあつたのか？ と全身を打ちのめされるような感激で観たのである。」[1] ということのように、けつこうキラキラしたものが好きだったのかなと思う。

星空が現れる詩には以下のようなものがある。

### 夏の星に[2]

まばゆいばかり

豪華にばらまかれ

ふるほどに

星々

あれは蠍座の赤く怒る首星 アンタレース  
永久にそれを追わねばならない射手座の弓  
印度人という名の星はどれだろう

天の川を悠々と飛ぶ白鳥

しつぽにデネブを光らせて

頸の長い大きなスワンよ！

アンドロメダはまだいましめをとかれぬままだし

冠座はかぶりてのないうままに

そつと置かれて誰かをじつと待っている

屑の星 粒の星 名のない星々

うつくしい者たちよ

わたくしが地上の宝石を欲しがらないのは

すでに

あなた達を視てしまったからなのだ きつと

ネーブルの樹の下にたたずんでいると[3]

茨木のり子

白い花々が烈しく匂い

獅子座の首星が大きくまたいた

つめたい若者のように呼応して

地と天とふしぎな意志の交歓を見た

たばしる戦慄の美しさ！

のけものにされた少女は防空頭巾を

かぶっていた 隣村のサイレンが

まだ鳴っていた

あれほど深い妬みはそののちも訪れない

対話の習性はあの夜 幕を切った

美しいものへの憧れが強いなかで、それも一番強い思春期に戦争

があつて、一番美しいもの、綺麗なもの、キラキラしたものは唯一

星空だったのかな。

今見る星空よりもずつと綺麗ですよ。キラキラ宝石箱のよう。震災

や大洪水で停電になった時、その場では言葉に出しづらけれど、後

になって多くの人が、停電の時みた星空の美しさは息を飲むほどの

もの。

国敗れて山河あり、自然すら焼け野原で美しい姿を失っている。地

球という自然を包むもつとも大きな自然の器が宇宙。何があつても

最後までこのころのが宇宙の美しさ。

「ネーブルの樹の下にたたずんでいると」[3]で述べている「地と天との不思議な意志の交換」の意味は不明。人と宇宙というもつとも大きな自然との会話？

#### 引用文献

- [1] 茨木のり子集 言の葉―(筑摩書房)「はたちが敗戦」より、茨木のり子、pp.194-195
- [2] 「見えない配達夫より」
- [3] 対話 茨木のり子 「対話」より、茨木のり子詩集 思潮社 p.19
- [4] 詩のこころを読む：茨木のり子、岩波ジュニア新書⑨、岩波書店
- [5] 茨木のり子への恋文、戸村雅子、同書刊行事務局、ISBN 978-4-9906738-3-3
- [6] 茨木のり子さんと星空・宇宙、柴田晋平、茨木のり子六月の会会報 No.77, 2020.6.1, page 1-2